



INTERVIEW インタビューー： 江崎健太郎

田中伸彦先生に学ぶ、 「ドロップベッド」。 治療家に求められるものとは？

江崎：

昨今、整骨院が増えてドロップベッドもよく売れているのですが「買ってみたいけど使い方がわからない」と言う方の声を多く聞いています。それで、私共としてもドロップベッドのセミナーをやることを検討していたのですが、なかなか良い先生が見つからなくて…そんな中、この度、非常にお忙しい田中先生に講師をしていただけることになり、ありがたく存じます。

田中先生の治療院では、ドロップベッドを多用されて、結果もたくさん出しておられる。先生のお考えになる「ドロップベッド」とは、どのようなものですか？

田中伸彦先生（以下敬称略）：

ドロップベッドの特徴としては、まず、治療家への負担が少ないということです。重力を利用できるので疲労が少ないです。負担なしに緊張の解除ができたり、筋肉の操作もできます。それから、安全性も高いです。アジャストメントとかHVLA※1でやる時は、関節の可動域をこえて生理学的限界の範囲でやります。解剖学的限界の範囲をこえると骨折しますから。それを機械で、予め振幅を抑制しているわけですから安全と考えられます。でも、安全と言っても大前提としてしっかりしたやり方でないといけません。治療家が、ちゃんと訓練をして、それに伴う技術を身に付けることは絶対条件です。その上で、患者さんの状態によっては、使える技術が制限されますから、その場合は他の方法を考えます。だから、私は、なんでもかんでもドロップベッド一辺倒ということではありません。医学は「サイエンス&アート」であると言われますが、このアートの意味は芸術ではなく「熟練の技」という意味です。だから、単なるテクニックとは違うんです。最近のセミナーでは、練習方法のレクチャーはあまりないですし、練習をしないでセミナーで見ただけでわかった気になってしまう治療家も多いように思います。

江崎：

技術の礎の有無は、最も重要なことですね。

田中：

それがなくてダメです。もし、やり方を間違えると患者さんを損傷させてしまう。今、言いましたけど、治療家に求められるのは単なるテクニックではなくてアートだということです。肉体的な訓練が必須だけではなく、そのドロップの回数やスピードをどのくらいにするのかとか、一回ずつの感覚や刺激の量を考えてコントロールできなくてはいけません。やり方が悪くて効果が出ないのに「この方法はダメだ」と思い込んでいる治療家もいますが、そうじゃなくて技術の問題なんですよ。

それから、もう一つ大事なことがあって、それは検査と診断です。アプライド・キネシオロジーの創始者であるDr. ジョージ・グッドハートは「とにかく検査」という風に、非常に検査を重要視されていましたが、それは、やはり正しいことだと思います。検査を重ね、結果が出るまでやって、その結果を考えるとということは大切です。

江崎：

今回のセミナーでは、安全にやる、効果を出すところを先生の提唱されているニューロ・ファンクショナル・メディシン※2（以下NFMと略）と、ドロップベッドを組み合わせて解説していただけるのですか？

田中：

NFMの全てを1回で伝えるのは無理がありますが、まずは神経機能医学として「なぜ治るのか?」、あるいは逆に「なぜ治らないのか?」を考えてもらいます。そこに、医学的・科学的にどう理由があるのかということに、しっかり向き合ってもらいます。それから、今回はドロップベッドの簡単な治療方法も紹介しますし、それをご自身の治療室等でも練習できるトレーニング方法もお教えしたいと思います。セミナーは、あえて少人数制にして、受講

者の方には、私がより近い位置からアドバイスができればと思います。

江崎：

そこまでやっていただけるなんて、すごいことですね。セミナーで、そこまで実技を丁寧に指導される先生は少ないです。指導も練習方法もきちんとデザインして伝えてくださるのは、武道の師範でもいらっしゃる田中先生だからこそですね。

田中：

本当は、企業秘密にしておきたいんですけどね。(笑)でも、社長(江崎)には、お世話になったので何か恩返ししたいと思っていましたし、私がこのまま墓の中に持って行ってもしかたないと思ったので。セミナーは「こうやるんですよ、わかりましたね?それでは皆さんもやってみてください、さようなら。」と終わらせるんじゃないで、ちょっとお付き合いするつもりで、技術等を練習・実践して行く内容にしようと思います。今回は初回なので、概念や検査方法等の時間を多くとります。だから、テクニックの方はそんなにできませんが、NFMのわかりやすいドロップテクニックを披露いたします。一つだけ申しておくのは、私の使い方は、トムソンテクニックとはまるで違います、アプローチしている手法も違いますということです。

江崎：

セミナーで用意できる現状のベッドでも、NFMのドロップテクニックは使いやすいでしょうか？

田中：

そうですね、使いにくいところはあるから、いずれはNFMに使いやすいように改良したいという夢はあります。そうすれば、万能的なベッドになりますから。でも、これは強調したいことなんですけど、まずは、それ(NFMの施術)をやっていたら、患者さんはすぐにわかります。

講師：田中伸彦
開催日：2018年2月4日(日)
時間：00:00～00:00
会場：□□□□□□□□

定員：□名
(定員数に達し次第受付終了)
受講料：00,000円
主催：江崎器械株式会社

お問合せ・申込先：
江崎器械株式会社 / セミナー受付係
TEL.0120-880-497

「楽になりました、もう痛くないです。」という結果が出せます。もちろん、それは、このドロップベッドテクニックが適応の患者さんで、患者さん自身を壊さないためのアートを身に付けた治療家の場合の話ですが。だから、とにかく技術を習ったら、トレーニングして習得していただきたいです。「セミナーに出ただけで、できた！」というものではないですから。そして、単発で終わらせずに、例えば、**会員^{※3}間で**ネットワーク化してコミュニティを作り、疑問点をあげたら「ここはこうした方がよいですよ」等のやりとりを通して、更にレベルアップして行けば良いと思うんです。練習・実践・再確認、そういうことを継続的にやって行けるようになれば良いなと。

江崎：
今までセミナーで、(講師のテクニック)見て、(講義を)聴いて、満足されていた先生方がいらっしゃるとしたら、ぜひ、田中先生のセミナーに参加していただきたいです。先生の技術を見たら、自分の現状のレベルもわかるでしょうし、できないことに気づいていただき、それができるようになる過程を楽しんでいただきたいです。このセミナーはNFMの入口になりますね。

田中：
今回のセミナーは、NFMセミナーのベーシックコースの一つの単位と考えていますので、出ていただいたら、神経機能医学のベーシック会員に入ってもらえるようにしたいと考えています。

江崎：
話は変わるのですが、田中先生の治療院は、子どもの患者さんも多いですね？私も息子を診ていただきましたが、先生は、子どものあやし方というか、接し方がたいへんお上手だと思いました。

田中：
子どもの患者さんは、すごく多いですね。小さなお子さんからは「プーさん先生」と呼ばれていて、プーさんのぬいぐるみをいただいたりします。(笑)
子どもの病気はとて難しくて、診れば診るほど「小児科ではお手上げです」ということも多いんです。登校拒否の子やパニック障害の子もいれば、発達障害の子もいる。発達障害といっても、その範囲は広くて、言葉さえ話せない中学生もいます。でも、私にとったら、そういう診断名はいつでも良いんです。機能としてどうなっているか

にアプローチをするだけなので。全ては、脳の機能に関係してくるわけですから、それを身体の脳神経、受容器、そして筋骨格系からのアプローチで良くして行く。そして、栄養の指導もします。機能医学の中には、食べ物や栄養で体の病気を良くして行くという概念があります。神経学も運動生理学も栄養学も、全て応用し、研究して構築したのがNFMです。

江崎：
それから、田中先生のところには、遠方から来られる患者さんも多いようですね。

田中：
患者さんの半数以上は、他府県の方なんです。関西近辺だけじゃなくて、東北や九州等から来られる方もいます。海外では、ドバイから来られる方もいます。「どこで何をやってもダメだった」とおっしゃって、私のところへ来られる方が多いです。でも、遠方の方は頻りに治療ができませんから、それをどうするのかは非常に難しいですね。それはそれなりに、EBM (evidence-based medicine) を使って、治療をデザインしないとイケない。自宅でできるエクササイズのことや栄養まで、全般的な指導をしています。

江崎：
海外にまで患者さんもいらっしゃるには驚きました。院の宣伝活動も、積極的にされているのでしょうか？

田中：
いいえ、特に宣伝活動はしていません。患者さんの口コミでそういう風に遠方から来られる方も増えたんです。でも、評判が広まると難しい病気の患者さんも来ますから、それに対応するには、治療のレベルも上げて行かないとイケない。昔、うちのスタッフから「先生は患者が多いのに、なぜセミナーへ行ったり、朝早くから来て勉強しているんですか？」と聞かれたことがあるのですが、患者数が増えれば研究も勉強もなくても大丈夫なわけではないです。経営面では、患者数は多い方がよいですが、それを持続するためには、自分がレベルアップして行かないとイケないですよ。一般企業でもそうですが、ただ同じことをやって行くのではダメなんです。宣伝に派手にお金をかけても経費がかかるだけで、本当の意味で食べて行けなくなります。治療家は、何より患者さんを治すことに邁進しなくてはイケません。患者さんの二-



小さなお子さんから「プーさん先生」と呼ばれている田中先生。院内には患者さんからももらったぬいぐるみがたくさん飾られており、先生のお人柄が偲ばれる。



タナカ神経機能医学研究所
田中伸彦 所長

- カイロプラクティック理学士 (B,C,Sc)
- I.C.A.K. 認定ドクター アプライドキネシオロジスト
- NEXT (自律神経の検査と治療) 療法 創始者
- 奈良カイロプラクティック業協同組合 元理事長
- 国際実践合気道連盟 師範 六段
- 活殺術 玄流 宗家

※プロフィール等の詳細は、HPをご覧ください。



NExT-Institute Facebook page
(フェイスブックには田中先生のセミナーの様子も紹介されています)
<https://www.facebook.com/NExT.NFM/>



NExT-Institute
(田中先生主催の医療関係者向けサイト。セミナー情報などはこちら)
<http://next-institute.org>

ズにこたえられれば、来院患者数は自然に増えるわけです。だから、我々がやるべきことは、きちんと治っていただけるように、研究と開発、進化を続けることです。ドロップベッドはそのうちの一つです。

江崎：
なるほど、おっしゃる通りですね。お話をうかがって、ますます2月4日のセミナーが楽しみになって来ました。本日は、お時間をいただきありがとうございます。大変、勉強になりました。

※1 = HVLA (High-Velocity Low-Amplitude) 高速低振幅のスラスト。オステオパシーの古くからある代表的なテクニック。カイロプラクティックではアジャストメントという。

※2 = ニューロ・ファンクショナル・メディシン (Neuro-functional Medicine) とは、タナカ神経機能医学研究所にて開発の治療システム・治療全体の医学的概念を示しています。

※3 = NExT-Instituteの神経機能医学学会のBasic会員